

The excursion to prague and Germany

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柳井, 雅也, 実習参加学生 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24020

〈海外地域実習報告〉

プラハとドイツ北中部巡検

柳井雅也・実習参加学生

東北学院大学地域構想学科

1. はじめに

2017年8月28日から9月7日にかけて、プラハおよびドイツ北中部の諸都市を調査実習した記録である(図1, 表1)。達成目標は、①多様な産業の成り立ちや特徴を理解できるようになる。②都市構造(または再開発)と歴史を通じて、外国の街の構造をみる視点が学べる、③6次産業の先進地域のレベルがわかることに置いた。

それに沿って調査実習では、プラハ市(以下、「市」は省く)とケルンの都市構造、デュッセルドルフの日系社会と日系企業および旧市街地区、リュウデイスハイムの6次産業(ワインツーリズム)と観光客調査(ハンブルクでも実施)、ヴォルフスブルクのフォルクスワーゲン展示場見学等、産業全般の視察と調査体験を行った。またケルン市ではケルン大学地理学部スタッフの協力を得てE.Boris教授講義(ケルン市とケルン大学)と現地案内をしていただいた(表1)。

以下、参加学生による感想を交えた現地報告を行う。



図1 調査実習行程図

表1 調査実習行程表

	日程	移動・滞在先	行動
1	8.28 月	成田⇒ワルシャワ(経由)⇒プラハ	移動
2	8.29 火	プラハ	市内踏査
3	8.30 水	プラハ⇒フランクフルト⇒リュウデイスハイム	ワイン博物館(製造工程学習)、観光客アンケート調査
4	8.31 木	リュウデイスハイム⇒ポツバルト経由⇒ケルン	移動
5	9.01 金	ケルン	ケルン大学(地理学教室主催:①E.ボリス教授による特別講義、②キャンパスツアー、③市内巡検)
6	9.02 土	ケルン⇒デュッセルドルフ	日本街区、旧市街地見学
7	9.03 日	ヴォルフスブルク	フォルクスワーゲン工場見学
8	9.04 月	ハンブルク	倉庫街およびバイエリア再開発事業調査、観光客アンケート調査等
9	9.05 火	ハンブルク⇒ワルシャワ	ハンブルク:マルクト見学等
10	9.06 水	ワルシャワ⇒(機中泊)	ワルシャワ大学、歴史地区
11	9.07 木	⇒成田空港 入国手続後解散	

2. 訪問先の国と都市の視察内容と感想

この章で取り上げた地域は、事前学習と現地の視察時の様子、現地のパンフレット、現地説明板、現地聞き取りと参加学生の感想もとに記述している。

(1) チェコ共和国プラハ市

チェコ共和国はヨーロッパの中心に位置しており、ドイツ、オーストリア、ポーランド、スロヴァキアに囲まれた内陸国で、四季がはっきりした国である。国の面積は78万8866km²で、日本の約5分の1の広さにあたる。人口は1057万人(2016年12月末現在, チェコ統計局)の人々が暮らしている。チェコ共和国の首都プラハ市はヴルタヴァ川の東西両岸に発達した町で、14世紀に神聖ローマ帝国の首都として繁栄した。ここは「百塔の町」とも

呼ばれ、ロマネスクやゴシック、バロック等、中世以来の様々な建築様式が混在する古い街並みや建物に特徴がある（図2、写真2）。そのプラハ市の都市構造を視察する為2017年8月29日（以下、全て現地時間）プラハ市を訪れた。



図2 チェコ共和国とプラハ市の位置

プラハ旧市街地区を流れるヴルタヴァ川の西岸は小高い丘になっており、プラハ城はその高台に建っている。歴代の王の居城であり、現在は大統領府が置かれている。

870年、プシェミシル朝（ボヘミアのチェコ人王朝。1306年に断絶。）の実質的始祖・ボジヴォイ1世によって建設が始まった。はじめは聖母マリア教会であったが、14世紀、カレル4世の時代にゴシック様式の聖ヴィート大聖堂、ロマネスク様式の聖イジー教会や宮殿等が建設された。

城の門には、18世紀に後半に作られた大きな彫像「戦う巨人たち」が飾られている。この門を進み、第1の中庭から門をくぐると第2の中庭があり、この広場には大統領府があった。さらに門をくぐると第3の中庭があり、聖ヴィート大聖堂が堂々とそびえていた。

この聖ヴィート大聖堂は20世紀に完成した。1番高い塔の高さが99m、内部の幅が60m、奥行が124mある。チェコで最も大きな大聖堂である。元々は930年に建設された、ロマネスク様式のロトンダと呼ばれる円形のシンプルな教会がこの大聖堂の起源となっている。それから約600年かけて現在の姿となった。高い天井と美しいステンドグラスが非常に印象的で、ステンドグラスの中には世界的に有名な画家であるアルフォンス・マリア・ミュシャの作品もある。

ストラホフ修道院は1143年に建てられた。バロック様式の塔が印象的なこの修道院には13万冊もの蔵書がある。「哲学の間」は1782年につくられた図書館である。高い天井には西洋の科学とキリスト教の歴史を表した華やかなフレスコ画「人類の歴史」が描かれている。哲学や天文学、数学歴史、文献学等の本が所蔵されている。

「神学の間」は1679年につくられた図書館で、神学や宗教関係の2万冊以上の図書が収蔵してあることから「神学の間」と呼ばれるようになった。半円の形をした天井には贅沢なスタッコ細工が施されており、大きな地球儀が並べられている。また、神父の彫像や明るく丸い窓も見られ、哲学の間と比較すると賑やかで明るい印象の図書室となっている。

カレル橋はヴルタヴァ川に架かる橋である。この橋は14世紀後半から15世紀初頭にかけて、カレル4世の時代に造られた。12世紀に初めて造られた時は木造だったが、1402年に現在の石造りの橋になった。プラハ最古の橋で、全長は約520m、道幅は約10mである。歩行者専用の橋で両側の欄干には30体の聖人や英雄の像が並んでおり、その中でも最も有名な聖人像である聖ヤン・ネポムツキー像は台座の部分の銅板に触れると幸運が訪れるといわれている。その為多くの観光客が銅板に触れようと集まっていた。

頭上に5つの星がある姿が印象的な聖ヤン・ネポムツキー像は14世紀、ボヘミア時代の司祭だった。王妃の不義に関わる告解を受けるが、ボヘミア王・ヴァーツラフ4世が聞き出そうとしても黙秘を貫き、激怒した王によりヴルタヴァ川へ投げ込まれる。その後遺体はプラハ城で安置され、18世紀に行われた調査の際に舌が腐らずに残っていた、という「奇跡」から有名になった。

旧市街広場はヴルタヴァ川の東岸に位置している。11世紀頃、ドイツやフランス等との商取引の発達に伴い形成された。

ここでは教会や商人たちの住居等、広場を取り囲む建物はゴシック、バロック、ルネッサンス等、様々な建築様式を見ることができた。縦に2つの

文字盤の並ぶ天文時計や、旧市庁舎、水色や黄色、桃色等の建物が広場を取り囲み、カフェや土産物屋、ストリートパフォーマーや楽団等で賑わっていた。また、この広場の中心にはヤン・フスの像がある。15世紀に宗教改革の先駆者として活躍した人物であり広場のシンボルとなっている。

ヴァーツラフ広場は、14世紀、カレル4世の時代に造られた新市街に位置する広場である。北西から南東に約750mにわたる縦長の広場である。

当初は「馬市場」と呼ばれていた。10世紀、ヴァーツラフ1世はチェコにキリスト教を広めようとしたが、これに反対する弟とその家臣に暗殺される。死後、チェコの最古の守護聖人として、また抵抗のシンボルとして、馬に乗った騎士の姿を像とした。1848年に聖ヴァーツラフにちなんでヴァーツラフ広場と改名され、それに伴い広場の南端に有名な聖ヴァーツラフ像が造られた。十字架を胸につけ、槍を高くかかっているのが特徴である。

この広場は、1918年「チェコ・スロバキア独立宣言」、1968年「プラハの春」、1989年「ビロード革命」等の運動やデモが行われる等民主化を求める事件で多くの人々が集まることで有名である。私達が訪れた時は、古い建物を利用したレストランやオフィス、デパート等が並んでいた。

(感想と考察)

プラハは歴史のある都市であり、500年以上も前の建物が多く現存しており、日本の都市とは異なる街並みであった。高台に建つプラハ城から町を見下ろすと赤茶色に統一された屋根が一面に広がっており、ヴルタヴァ川の上にカレル橋の架かる様子は非常に美しいものであった。

一方、「観光都市として観光客に向けたサービスを展開するあまり現代のアレンジが加えられてしまっていると感じた。歴史的な建造物を保全しているのに対し、その当時にはない機械の融合は観光地になってしまったとマイナスの面と考えられる。」(田野崎智典)、「レンガで作られた建物や石畳の古い街と高層ビルが立ち並ぶ新しい街が共存する街である。」「新旧の2面性があるからこそ旧市街地の良さが際立っている。」(山崎雄之)

「エリアによって雰囲気が変わるといった印象があった。歴史を感じさせるプラハ城周辺と人々が多く集まるカレル橋を渡った後とは様子が全く異なっていた。」(佐藤夢華)といった意見があった。

こうして、プラハは街並みや文化の歴史を保ちながらも、現代の都市機能も集約・付加していく国際都市と考える。これがプラハ市の都市構造を大きく規定しているのだと考えた。この点の証拠の裏付けとより深い分析は今後の課題としたい。

(鈴木とも代)

【文献, web page】

外務省HP (<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/czech/data.html>) (2017年10月1日確認)

ダイヤモンド社『地球の歩き方 チェコ ポーランド スロヴァキア2017-2018年版』

チェコ・トラベランドHP (<http://www.czechtraveland.com/-15>) (2017年10月1日確認)

(2) リューデイスハイム

リューデイスハイムはドイツ有数のワイン産地ラインガウの代表的な町である。ワイン産業の規模は、ワインを基軸とした観光業に次いで二番目となっている。当町のワイン産業を世界的視点で見ると以下のとおりである。世界のワイン生産量はフランス、イタリア、スペインの三カ国で世界の50.1%を占めていて、ドイツは世界10位と3.4%に過ぎない(2016年: O.I.V: International Organization of Vine and Wine 国際ブドウ・ブドウ酒機構調べ)。

ドイツの生産量がさほど高くない理由は、ドイツ最南端でも北緯48度近くで、日本の最北端と同じ緯度(寒冷地)にこの国が位置していることである。しかし、ラインやモーゼルの河畔は地形・地質に恵まれ、ラインやモーゼルはワイン産地として世界的に有名である。ドイツのワインは、ブドウ品種のリースリングで高級白ワインが、シュペートブルグンダーで赤ワインが生産されている。ドイツワインは90%近くが白ワインといわれている。そのラインのワイン産地の一大中心地が

リュースハイムである。その起源は1399年にはすでにワイン畑があったそうである。

当町にはブレムザー城（10世紀頃築城）がある。1950年ごろからワイン博物館として人気を集めるようになった。ここでは当城の歴史やワイン造りの歴史、工程を学ぶことが出来る。屋上からはブドウ畑が一面に広がり、ワイン産地ならではの穏やかな景色を望むことが出来る。

（感想と考察）

リュースハイムはライン川沿いに町が形成されており、その後背の丘陵地がブドウ畑で覆われている（写真2）。このブドウ畑に囲まれるように、この町に、「つぐみ横丁」はじめワインレストランや土産物店が軒を連ねている。

私はこの町に来るまで2つの疑問があった。一つは「なぜ傾斜状にブドウ畑があるのか」である。実際に見学したことでそのヒントを得ることが出来た。それは、ライン川から斜面に沿うほうが、光の川面による反射で、下からも光が当たる為糖度が増すことであった。もう一つは「ドイツの小さな町がなぜブドウ畑とライン川で魅力ある町になったのか」ということだった。これはリュースハイム駅に降り立って、「景観」として直観的に分かった。ブドウ畑から観光産業が派生している。地産地消（Local Production）が分かった瞬間だった。その後、「つぐみ横丁」で食事をして地元の料理を食べた時、それは「実感」に変わった。

私は、将来やってみたいこととして農業×観光、農業×体験のまちおこしがある。現在はさまざまな日本各地のモデルケースについて実際にお話を聞く等して、調査をしているがリュースハイムから大きなヒントを得ることが出来たように思う。

（杉澤航平）

（3）ケルン

1）ケルン巡検

8月31日、リュースハイムからKDラインを利用し、ポッパルト経由でケルンに向かった。

ケルンはドイツの中で、ベルリン、ハンブルク、

ミュンヘンに次ぐ4番目に大きい都市である。また、州都であるデュッセルドルフ、ドルトムント、エッセン、デュースブルクが含まれるノルトライン・ヴェストファーレン州にケルンも含まれている。人口は約100万人である（写真3）。

ケルン大聖堂は約600年の長い年月をかけて完成したフランス式ゴシック様式のカトリック教会で、ゴシック様式の建造物としては世界最大級と言われている（ケルンの歴史と経済はE.Boris教授の特別講義参照）。

市内巡検はケルン大学地理学部スタッフのB.Amelie准教授とポストクのF.Sevastian氏の案内で実施した。また1年のうち3分の1近くケルンで事業活動を行っている建築家の小室大輔氏（エネクスレイン）と、ケルン在住の町田綾子氏も同行した。

ケルンメッセ駅で降り、ホーエンツォレルン橋の方へ少し歩いた場所にケルン市を一望することができるケルン・トライアングル・パノラマと呼ばれる高層ビルに登った。このタワーの正面にケルン大聖堂が見えるが、このビル計画によって2004年に危機遺産リストに認定された。その後、都市景観を守ることを決断したことから、2006年にケルン大聖堂は危機遺産リストから削除された。

ケルンは植民都市のコロニアという意味からKöln（ケルン）という名前が付いた。現在のケルンは植民都市時代に作られた城壁が一部だけ残っている。第二次世界大戦時、ケルンは英米軍による激しい空襲に遭い、街のほとんどが壊滅した。しかし、ケルン大聖堂だけは破壊されることはなかったという。パノラマタワーからケルンの主要産業の一つである放送局や、見本市を行うケルンメッセの説明も受けた。

ケルンでの生活を見る為B.Amelie准教授宅を訪問した。B.Amelie宅は4階建てのアパートで第二次世界大戦前に建築された。天井のレリーフのような模様が当時の名残をとどめている。空襲で破壊されなかった住居は、歴史がある為家賃が高いそうだ。日本とは異なることに驚いた。ま



写真1 プラハ市内 (撮影: 櫻井美紅)



写真5 ケルン大学内部の様子 (撮影: 山崎雄之)



写真2 リューデイスハイムのブドウ畑 (撮影 杉澤航平)



写真6 市庁舎 (撮影: 山崎雄之)

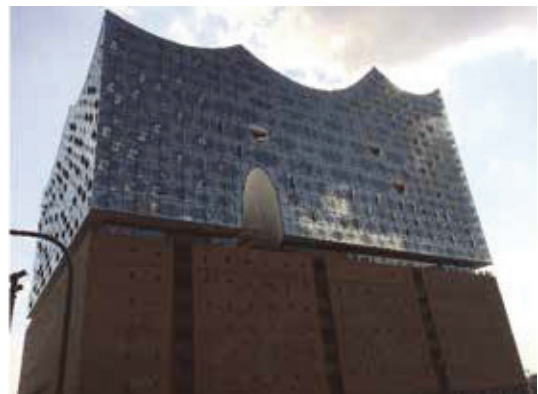


写真7 音楽堂「エルプフィルハーモニー・ハンブルク」
(撮影 大土悠起)



写真3 対岸からケルン市内を望む (撮影 山崎雄之)



写真4 ケルン大学 (撮影: 山崎雄之)

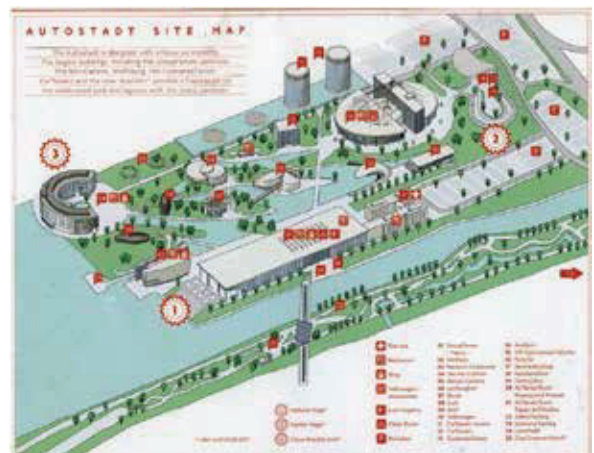


図3 アウシュタット全景
(出所) アウシュタット「パンフレット」

た、上層階に行くほど天井が低くなっている事や3つの建物を繋げている為に床に傾斜があるという事、さらに中庭があるという事等、日本の一般的な建物とは異なっていた。この違いが一般的なものか、あるいはB.Amelie宅の特殊性なのかは興味と疑問が残った。

(感想と考察)

事前学習では、ケルンはライン川の両岸で物流や交通の拠点として発展した街であり、現在は観光地として主にケルン大聖堂等の古くから残る建造物が立ち並ぶ街というイメージを持っていた。しかし、現地に行ってそれだけではないことが分かった。

確かにケルン大聖堂は壮大な建築物だった。ケルン中央駅を出てすぐの所からケルン大聖堂はその姿を現す。近づいて改めてその繊細な作りに感銘を受けた学生も多くいた。また、約600年の歳月を経て完成した大聖堂からは「その歴史の深さを改めて感じられた」という意見や、「これを作ったのが同じ人間だということに改めて驚いた」等の感想があった。

しかし、街歩きをすると、ケルンメッセやメディア関連産業が集積していて、国内外に文化やトレンドを発信する拠点になっていることがわかった。またケルン大学をはじめとして12の大学があるだけでなく、ドイツ航空宇宙センター等の研究機関が集中していることも分かった。先端技術を学ぶ若い年齢層が多くいるということは周辺産業にとっても優秀な労働力を確保することにつながる。と考える。

さらに、ケルン中心部から1時間以内に3つの空港があり、鉄道も拠点性を有し、ライン川の交通網も発達していることがわかり、交通の利便性にも優れていることが分かった。

その結果、ケルンは文化の中心地でありながら、同時に研究機関、情報産業、交通の中心地である事がわかった。今後も事前学習で得た知識と現地で得られた情報や体験を糧に今後も考え続けたい。

(山崎雄之)

2) E.Boris教授による特別講義

2017年9月1日、ケルン大学の講義室にてE.Boris教授による特別講義が行われた。

まず「ケルンの歴史と産業」について記す。かつてこの地はローマの侵略を受け植民地として創建された。市内を南北に貫くライン川での交易で繁栄した。30年戦争(1618-1648年)によってケルン一時衰退したがフランス革命(1787年)以後は、ライン川の海運の拠点として商業都市として繁栄した。近代以降はケルン大学の再建や大企業(フォード等)の誘致をして、産業都市としての性格を帯びるようになった。そして、第二次世界大戦による壊滅とその後の復興によって今日に至っている。

現在のケルンは、化学工業、保険業、番組制作を主としメディア関連産業、自動車産業、文化関連の5つが主力産業となっている。保険業は、ライン川の海運をはじめ交通の拠点性が高まったことから、保険関連会社が多数進出してきた為、メディア関連産業はドイツ国内のTV番組の制作が多く行われていることから関連番組制作会社の集積が進んだ。自動車産業は、フォードが1930年代に進出しことが大きい。現在、自動車のデザイン部門を中心に集積が進んでいる。その他、ケルン大聖堂をはじめとする歴史・文化を背景とした観光業も盛んである。

次に「ケルン大学」について記す。当大学は1388年にケルン市で経済力を持つ市民が中心となって設立した神聖ローマ帝国(ローマ教皇ウルバヌス6世の認可)の大学である(写真4,5)。ドイツ国内ではハイデルベルグ大学について2番目に古い大学である。

学生数は約5万人となっておりドイツ国内で2番目に大きい大学である。学部は経済・社会学部、法学部、医学部、人文学部、理学部、教育学部、人間科学部の7つの学部によって構成されている。

学部から専攻ごとにコースに分かれ、研究費が分けられている。年間では約6000人の学生が入学し、ドイツ国外からの入学生も年々増加してい

る。これは本学のグローバル化政策によるもので、ニューデリー、ニューヨーク、北京に大学の支部を持っている（2017年現在）。この他、各研究室が世界中の研究室と繋がりを持っている為、世界各地から入学生を集めることができている。

留学生の入学に関しては、ドイツ国に奨学金の制度はないことから、学生が自ら企業に研究費助成の交渉をすることが多い。

3) 質疑

ここからはE.Boris教授と東北学院大学学生と教員との質疑である。

(ケルンの産業構造について)

E.Boris 教授：ケルンでは前述のように貿易の一時衰退後に新たな産業構造が形成された。1930年代の自動車産業の進出はケルンの主力産業として長く続いてきたが、現在は衰退しつつある。現在のケルンでは失業率が高まる問題も発生している。ケルンの産業構造はハイテク産業へと変化している。しかし、その産業移行に際し、労働者のスキルが対応できていない。このミスマッチが失業率を高めている。この移行期が今後のケルンの課題と考えられる。

また、この問題には移民の存在も関係している。1990年代まで、移民が定住し世代を超えて国内に留まるとは考えられていなかった。ドイツ国内では客人であるから帰るものであると考えられていたのである。しかし、二世、三世の定住が進み、その後も移民が流入し続けた為、中にはドイツ語ができず就業もままならなかった為、国内の失業率の高まりに大きく影響を与えた。移民の占める割合として、一世代だけの移民の割合では約20%であるが、二世代目では約40%が移民である。

現在では移民をどのように産業構造に組み込んでいくかが課題となっている。以前は、トルコ系移民が多かったが、現在ではシリア、アフガニスタンやアフリカの紛争地帯からの移民が増加している。

(ドイツ地理学におけるカントの影響)

E.Boris教授：18世紀に自然は神学的な観点から恵みを与えるものであると考えられていたが、

災害によりヨーロッパでは危険を与えるものであるという考えがカントによって基礎づけられた。この自然決定論が地理学に与えた影響は大きく、現在でも論点の一つとなっている。

自然決定論から自然可能論へと変化し、現在では自然といかに共存をしていくかが論じられている。

講義の最後にE.Boris教授よりグローバリゼーションの中において地域研究とはどうあるべきかお話を頂いた。政治的、経済的にもグローバル化が進む世の中において、地域研究をする重要性は大きくなっている。世界各地が同じものに変化していくように見えているが、地域研究をすることでそうではないことが証明できる。さらに、グローバル化の中では地域はより複雑化している。地域が死ぬことはない。

(感想と考察)

今回の講義では貴重なことを多く教えていただいた。ケルンの産業構造についてのお話では移民との関係性について解説をいただいた。日本でも様々な産業において移民の受け入れが進んでいる。ドイツのように移民に関しての論点が日本においても広がることが今後あると考えられる。また、地域研究として移民のコミュニティが形成される地域についても研究する必要があると考えた。

受講した学生の感想からは、ケルンの歴史と産業構造について注目する意見が多かった。これは、講義後のケルン市内巡検によって理解が深まったことが要因として考えられる。

私自身はグローバル化における地域研究を深めていきたいと考えている。

(田野崎智典)

(4) デュッセルドルフ

デュッセルドルフはノルトライン＝ヴェストファーレン州の州都である。ドイツの西部に位置しベルギーとオランダに隣接している(図1-1参照)。人口は約61万人(2015年)で、これはドイツの都市の中で7番目に人口が多い。この人口

のうち約5,000人が日本人で、ヨーロッパではイギリスのロンドン、フランスのパリに次いで3番目、ドイツ国内では最大の規模となっている。であり、ドイツ国内では最大の居住者数となっている。

同市の旧市街地区はアルトシュタットと呼ばれ、石畳の道や古い街並みが今なお残されている。中心部には市庁舎がある。長年増築を続けた為、ルネッサンス、バロック、ロココといった三つの異なる様式が混在した建物となっている（写真6）。また、この旧市街は「世界一長いバーカウンター」と呼ばれるほど多くの飲食店（約260軒）が軒を連ねている。そこには醸造所を兼ねた酒場が数多くあり、高温で発酵させた名物のアルトビールを飲むことが出来る。

次に日本企業が集積するインマーマン通りについて説明する。ここは日本大使館や日系企業が集積する地域である。その理由は、同市は「ルール工業地帯の制御盤」としての役割があったことから、重化学工業関連会社の立地がみられた為、日系企業の立地が進んだ。それ以外にも旧首都ボンに近かったこと、鉄道、水運、空港等の交通拠点、メッセの存在等もある。日系企業の集積は1950年後半から始まり、1964年には「日本クラブ」創立、1966年にデュッセルドルフ商工会議所、1971年に日本人学校、1976年に日本人幼稚園ができた。日本人の居住者の増加により80年代末までに商社、銀行、保険、小売店、日本レストランといったサービス業の集積も進んだ。街中を歩くと多くの日本人と出会うことが出来る他、日本語表記のある看板も数多く見ることが出来た。

（感想と考察）

インマーマン通りは、海外であるにも関わらず日本の要素が多分にみられた。私達はインマーマン通りにある日本の食材を扱うスーパーを訪れたが、「日本で買う値段の倍ほどする商品ばかり」（櫻井美紅）「納豆が4ユーロだった」（大土悠起）という感想の様に日本とインマーマン通りのスーパーとで値段が大きく異なっていたことが驚きだった。

アルトシュタットは、バーやレストランからは

陽気な音楽が流れ、華やかな雰囲気があり「ドイツの週末の人々の過ごし方も知れて良かった」（杉澤航平）との感想があった。またハイネの生家やランベルトゥス教会といった18～19世紀に建てられた建築物が数多くあった。

デュッセルドルフの巡検を通して当地の歴史と日本との関わりについて学ぶことが出来た。

（佐藤夢華）

（5）ヴォルフスブルク

ヴォルフスブルクはフォルクスワーゲン（VW）が本社を置く企業城下町である。ここでは、そのフォルクスワーゲンのアウトシュタット（展示場）について記述する。

まず当社は1937年に設立され、現在、自動車は12ブランドとなっている。製造拠点は欧州に20か国、アジア太平洋、アフリカ、アメリカの11ヶ国に、合計120工場、従業員62万6715名の生産体制で、1日あたり4万3000台の車を生産している。2016年度グループ全体の売上高は2170億ユーロ、営業利益は54億ユーロ、販売台数は1029万7000台であり、売上高は世界ランキング1位である（『日本経済新聞』2017年1月30日付け）。

アウトシュタットは、「モビリティ（流動性）」をテーマに、自動車の歴史から最新技術や情報、そして自動車とそれを取りまく社会の未来像までを体感できる展示場である（図3）。開館は2000年6月である。施設はフォルクスワーゲンの価値を楽しみながら理解できるグループフォーラムや、様々なブランドの個性をアピールするパビリオンからなる。また、モビリティとその歴史を伝えるミュージアム、タイムハウス、そしてフォルクスワーゲンの納車センターとオートタワーで成り立っている。

特に納車センターは2つのタワーそれぞれが400台の新車を収容できる。納車センターから運ばれた新車は円柱状の立体駐車に次々と上っていき、ユーザーへの納車時には中央のロボットアームが新車をユーザーの前に持ってきてくれる。その他、各時代の名車の展示場等もある。

(感想と考察)

学生の感想は、「想像していた内容よりはるかに充実していた」という意見が多かった。カータワーを実際に見学したが、前面ガラス張りで車が電動アームで動いているのを見て、工業製品の見せ方や展示方法を感じることができ、日本との格差を感じた。また、アウトシュタット内の雰囲気についての意見も多かった。図3のように敷地内は川に囲まれており、自然の芝生が広がっている。ここから「クリーンな車のイメージを植えつける工夫がある」という意見があった。さらにパーク内では楽器演奏や、パフォーマンス、出店等、車の魅力以外に楽しめる内容となっている。「子供からお年寄りまで性別問わずすべての世代が参加できる」という意見もあった。

今回の実習を通して、フォルクスワーゲンの最新技術の情報がうまく発信されている様子と、日本にはない展示方法を見ることができた。

(阿部あかり)

(6) ハンブルク

2017年9月4～5日にドイツ北部のハンブルクを訪れた。主な訪問地は、倉庫街、音楽堂「エルプフィルハーモニー・ハンブルク」、イーゼ・マルクトだった。以下、記述していく。

ハンブルクはエルベ川の支流・アルスター川の河口にある欧州最大級の港を有し、中世からハンザ同盟の中心的役割を果たしてきたドイツ最大の物流拠点でもある。人口は180万人でドイツ国内第2位の都市で北部経済の中心地となっている。

6世紀にはすでに港湾都市として栄えていたが、この頃にはバイキングの襲来をたびたび受けていた。12世紀にはいとデンマーク王の支配下に落ち、12世紀後半にはデーン人やスラヴ人からも襲撃を度々受けた。しかし、デンマーク支配が終わると領邦君主からの独立を達成し、「自由都市」としての地位を確立した。これを機に、商人同士の遠隔地交易が活発化した。その発展の鍵となってくるが「ハンザ同盟」である。

「ハンザ同盟」とは、13世紀から17世紀まで存続した北ドイツの都市同盟。北海・バルト海貿易

で活動する商人たちの間に自然発生的にできた仲間団体である。そのハンザ同盟の中でハンブルクは、「バルト海の女王」リューベックと密接な商業関係を結び、ハンザの一翼を担うようになった。この「ハンザ」の最盛期において、交易の中心となったのが現在の倉庫街がある場所である。

ハンブルクは「ハンザの醸造所」という異名をもちビール、コーヒー、紅茶、砂糖、タバコが運ばれ保管場として倉庫が使われていた。実際に、倉庫街を目にしてみると、当時の名残だろうか、荷物を吊り上げる為のレールが見られたり、荷降ろしで使われていた橋があった。その橋のうち、船が通るときに開閉するものもあり、ハンブルクの都市の発展を感じた。

続いて、ハンブルクにおける再開発事業について述べていきたい。ハンブルクにおける再開発事業は「ハーフェンシティ」という欧州最大のウォーターフロント再開発プロジェクトである。この事業の特徴は、オフィス、飲食店、住宅街等の衣食住、また、レジャーやエンターテイメント等を組み込んだベイエリア再開発である。具体的には、2017年1月に完成した音楽堂「エルプフィルハーモニー・ハンブルク」がある(写真7)。こちらは、実際に訪問してみたが、展望台からはハンブルクの街並みが一望でき、建物も放物線状に造られたエスカレーター、波をイメージした曲面ガラス等独創的なもので、大勢の人で賑わっていた。その他にも、クルーズセンターや多くの保存船等もあり、港町の雰囲気と歴史を感じさせるものとなっていた。ハーフェンシティ内は、自動車道のみならず自転車道も整備され、多くのオフィスが集積していた。

(感想と考察)

かつてのハンザ時代に襲名した「自由ハンザ都市ハンブルク」という名に現れている通り、人々が伸び伸びと生活している印象があった。これは、港で街の景色を見ながら談笑している様子やマルクトでの人々のフレンドリーさ等から感じたものだ。人々が自分の時間をしっかりと確保できる環境、マルクトであったり、新たなビジネスフィールドともなっているハーフェンシティ等自分のや

りたいことをやれる環境がしっかりと整備されているのだろうと考えた。このような環境は日本にはまだ足りない部分であると感じた。

都市は新旧が混在していた印象で街の各所に歴史が感じられた。例として、「空港周辺において見たタクシーはハンザタクシー」(田野崎智典)というように一人一人が街の歴史を感じ、様々な考察をしていた。このハンブルクは私達がドイツで訪れた最後の街であった為か、これまででまわってきた都市との比較が一番できたと思う。ドイツの都市はどれも人や街の雰囲気、景観、違う文化も感じて、その中でもハンブルクは一番「街並みが美しい」、「人が温かかった」という声が参加学生から聞かれた。この経験(地域の見方・考え方)を今後の研究に活かしていきたい。(佐藤敬太)

3. 観光客へのインタビュー調査

(1) リューディスハイム

2017年8月30日、リューディスハイムに現地を訪れた観光客にインタビュー調査(使用言語:英語)を行った。質問項目は以下のとおりである。

A どちらの国から来ましたか?

B 今回の旅行は何日間の予定ですか?

ここを旅行先に選んだ理由は何ですか?

C ここに来るまでどこかに行きましたか?

D ハンブルクについてどう思いますか?

有効回答数は19件であった。以下、質問毎にその傾向や特徴を指摘していく。

A 「どちらの国から来ましたか?」

① ドイツ国内(ヴァーレンドルフ)	⑪ オーストリア
② スイス	⑫ オーストリア
③ アメリカ	⑬ イラン
④ イタリア	⑭ ドイツ(キール)
⑤ ドイツ国内	⑮ ドイツ国内
⑥ スウェーデン	⑯ アメリカ(アリゾナ州)
⑦ 中国	⑰ アメリカ(ジェネシー州)
⑧ ドイツ国内	⑱ スペイン
⑨ オランダ	⑲ アメリカ
⑩ ドイツ国内(フランクフルト)	

回答属性について、ドイツ国内(ハンブルクを含む)在住の回答者が6組と全体のおよそ3分の

1を占めていた。また、ヨーロッパ以外の国からきた6組のうちアメリカから4組が訪れていた。

B 「今回の旅の滞在日数とリューディスハイム訪問の理由」

① 5日間、美しい街だから
② 2週間
③ 16日間
④ 5日間
⑤ 1日
⑥ 10日間
⑦ 8日間
⑧ 1週間
⑨ 5日間、ライン川観光の為
⑩ 1週間、前に訪れた時も自分にあう街だったから
⑪ 10日間、ドイツ旅行で来たかったから
⑫ 10日間、ドイツ旅行で来たかったから
⑬ 2週間
⑭ 日帰り
⑮ 1週間
⑯ 2週間
⑰ 10日間
⑱ 10日間、景色
⑲ 6日間、ワインを求めて

19組のうち、日帰りから1日間が2組、5-7日間が7組、8-14日間が8組、それ以上が1組となっている。このうち、ドイツ国内の観光客は、日帰り、1日間、5日間、1週間が3組と、旅行期間が短い傾向がある。ヨーロッパ内部では、オランダ、イタリアの5日間を除けば、スイス2週間、スウェーデン10日間、オーストリアが2組とも10日間、スペイン10日間と相対的に長い観光旅行となっている。アメリカも4組中3組が10日以上で、長期旅行の傾向がみられる。

C 「リューディスハイムを訪れる前に行った場所」

20 行ってない。	30 無回答
21 ロンドン、ブリッセル、ケルン	31 無回答
22 ブラハ	32 無回答
23 行ってない。	33 無回答
24 行ってない	34 行っていない
25 フランス	35 行っていない
26 行ってない	36 無回答
27 無回答	37 行っていない
28 無回答	38 ロンドン
29 無回答	

無回答8組を除く11組について、他の観光地へは「行っていない」組が7組（有効回答の63.6%）と多数を占めている。有効回答について、まずドイツ国内組は①と⑮とも「行っていない」と回答している。いずれも短期滞在なのでほかに行く時間がないとも考えられる。近隣のスイス組はロンドン、ブリッセル、ケルンと比較的長期の旅行をしていることが分かる。アメリカは③が16日間でプラハ、⑯が6日間でロンドンに行っている。比較的短期の移動となっている。

D「リュースハイムのイメージ」

①特別に美しいところ。ワインが美味しい
②山を見るのが好きで昔から旅行で来ている
③美しく素晴らしい景観
④たくさんの美しい景観や芸術が存在する
⑤とても素晴らしい街
⑥ 素敵な場所
⑦快適
⑧景色が素晴らしい
⑨フェリーが良い
⑩景色が美しい
⑪大好きな街だ
⑫また来たいと強く思う
⑬美しい良い
⑭ 良い
⑮レストラン等観光客に特化した街
⑯無回答
⑰良き
⑱緑が豊か
⑲豊かな街

全般に、この街に対して好印象な人が多い。景観に赴きを感じる人が全体の過半数を占める。インタビュー調査の中で「また来たい」と話す人が多かった。ワインや緑豊かな自然、開放的な好環境に道行く人は満足しているようだ。

インタビュー調査全体を通じて言えることは、ドイツ国内や近隣国は短い滞在だが、その中で比較的長い組はロンドン等、ヨーロッパを広域的に観光している。また、短期滞在に分類された組でも、日本人の平均宿泊数2.25泊/人（2013年：日本交通公社調べ）に比べれば相対的に長い滞在となっている。日本の観光地は4-6泊向けにサー

ビス体制（近隣観光、食事のバリエーション、エンターテイメント等）が整っているとは言えないと考えるので、今後の日本の観光研究に生かしていきたい。

（大土悠起）

(2) ハンブルク

2017年9月4日夕方にハンブルクの音楽堂「エルプフィルハーモニー・ハンブルク」付近でインタビュー調査を実施した。質問項目はリュースハイムと同じである（調査地名のみ変更）。有効回答数は20件だった。以下、質問毎にその傾向や特徴を指摘していく。

A「どちらの国から来ましたか？」

①オーストリア	⑩ドイツ(マインツ)
②ハンブルク	⑪ドイツ(キール)
③ドイツ(ミンデン)	⑫ハンブルク
④ドイツ国内	⑬ドイツ
⑤ドイツ国内	⑭ドイツ(ケムニッツ)
⑥フランス	⑮南ドイツ(ミュンヘン)
⑦ハンブルク	⑯タイ
⑧ハンブルク	⑰ケンタッキー
⑨ハンブルク	⑱ハンブルク
⑩中国	⑲オーストリア

ドイツ国内（ハンブルクを含む）在住の回答者が14組と全体の70パーセントに及んだ。調査実施時間が夕方ということもあり（17時～18時）観光客が引いたことが関係していると考えられる。

B「今回の旅の滞在日数とハンブルク訪問の理由」

①3日間、美しい街だから
②在住
③10日間、ハンブルクに娘と孫が居るから会いに
④1日、エルプフィルハーモニーができた為
⑤1日、ハンブルクの街に興味があった
⑥3日間、ハンブルクの観光をしたかった
⑦在住
⑧在住
⑨在住
⑩5日間、仕事
⑪1日、エルプフィルハーモニーのコンサートの為
⑫3日間
⑬在住

⑭1日
⑮4日間、前から興味があっていつか来たいと思っていた、今回はオペラを見に来た。
⑯2日間、休暇
⑰1日、息子のバイオリン発表会
⑱1日、観光
⑲在住
⑳4日間、観光

20組中、現地在住者が6組(30.0%)を占めている。その他1日が6組(30.0%)となっている。最長で⑩の5日間となっており、それもビジネス観光となっている。全般に短期滞在が多かった。また、音楽堂「エルプフィルハーモニー」2組とオペラ1組と音楽関係の回答もあった。これは調査地の関係性が強いことを示している。

インタビュー調査の結果は、他の観光地へは行っていなく、近辺で観光を済ませている人が多い。そして‘Did you go anywhere before you came here?’の発音が聞き取ってもらえず無回答という結果が目立った。われわれ日本人が発音しにくい単語が含まれていたことも要因ではあると思うが、文法や言い回しが伝わりにくい現地の人に慣れ親しんでない言葉であったことも考えられる。

C「ハンブルク(エルプフィルハーモニー付近)を訪れる前に行った場所」

①エルプフィルハーモニー近辺	⑪無回答
②エルプフィルハーモニー近辺	⑫無回答
③着いたばかり	⑬無回答
④エルプフィルハーモニー近辺	⑭無回答
⑤エルプフィルハーモニー近辺	⑮無回答
⑥着いたばかり	⑯行っていない
⑦無回答	⑰行っていない
⑧無回答	⑱行っていない
⑨無回答	⑲ルビック
⑩無回答	⑳ミュンヘン

インタビュー調査の結果は「美しい街である」という回答が10件(50.0%)あった。ハンブルクの倉庫街は世界遺産にも登録された地である。またインタビュー調査を実施した「エルプフィルハーモニー」も今年竣工した。そのことは回答に反映されていると考える。

D「ハンブルクのイメージ」

①始めてきたがよいところ
②素敵な街
③すべていい
④景色が美しい
⑤街並みが美しい
⑥美しい街
⑦美しい街
⑧美しい街
⑨美しく、素敵な街
⑩好き
⑪いいところ、きれい
⑫雨がよく降り、水が豊富。ハンブルクにとって水は身近にあって特別な存在。
⑬料理が美味しい。食事を楽しみにここに来た。
⑭大きな都市だと思う。様々な文化があるがそれが魅力だと思う。
⑮歴史や文化がある街だと思う。景観が美しい。
⑯美しい街
⑰美しい街
⑱美しい街
⑲美しい街
⑳良いまち、水、雨、オリビアジョーンズ

(4) 2回の調査の比較考察

ここでは、2つのインタビュー調査比較考察を行う。まずどこから訪問したかについて、両地域合わせて51.3%(39件中20件)がドイツ国内から訪問している。そのうち、リューデイスハイムは、19件中6件(31.6%)、ハンブルクは20件中14件(70.0%)となっている。リューデイスハイムのほうが他国からの訪問者が多いことが分かる。その理由は、ハンブルクは夕刻に調査を行ったため、既に観光客がホテルに戻るか、別の場所に移動し、逆に地元住民などが散歩に訪れていた可能性がある。このバイアスを踏まえて以下特徴を指摘していく。

まず、滞在日数について便宜的に当地を含めて「1週間以上」の旅を基準に分けると、リューデイスハイムは13件、ハンブルクは1件だった。

リューデイスハイムは、その周辺には古城や宿泊地が点在し、複数日滞在型の「ライン観光」が

広域的に整備されている。また、当地は美味しいワインと美しい景観があり、当観光地の拠点でもある。実際にインタビュー調査では「ワインと景観」を目的に訪れている人が多かった。また、当地は子供達が少なく高齢者が多かった。大人の時間が「ゆったり」流れているようにさえ感じられた。一方、ハンブルクは「日帰り」と回答した人が多かった。多くの人の目的は「エルプフィルハーモニー」であった。調査地点や時間帯の問題もあっただろうが、都市型観光としての特徴「街並みや施設見学」がここで確認できた。

このようにしてみると、どちらの場所も「美しいまち」と答えた人が多かったが滞在日数、年齢層、旅の目的等、両地域の「違い」も見えてきた。いずれにしても、調査対象・時間等の均一化、調査地の歴史や現状認識等、課題が残ったが今後の研究に生かしていきたいと考える。

(佐藤勇氣)

4. おわりに

私達は11日間の海外実習を通して実際に現地に足を運ぶことで見えたものが多くあった。

達成目標に沿って総括していくならば、「①多様な産業の成り立ちや特徴を理解できるようになる。」について、ケルンの自動車産業の衰退と移民問題、情報産業の勃興等、産業構造の変化が起きている事、ヴォルフスブルクのフォルクスワーゲンの企業城下町における展示場（情報発信）の運営等、ドイツの変化を感じとることが出来た。

「②都市構造（または再開発）と歴史を通じて、外国の街の構造をみる視点が学べる」について、プラハは街並みや文化の歴史を保ちながらも、現代の都市機能も集約・付加していく国際都市と考えることが出来ることや、ケルンの古代の遺構と、大聖堂、それに第2次世界大戦による壊滅と経済

復興による、重層的な時間が垣間見られる都市構造、デュッセルドルフの旧市街地区と日本人街の棲み分け、ハンブルクの「ハーフェンシティ」の再開発事業等が確認できた。

「③6次産業の先進地域のレベル」については、リュートスハイムのワイン産業と観光業との6次産業の実態がわかった。特にブドウ畑と「つぐみ横丁」のレストラン街、それに土産物店とホテルの集積、古城の博物館としての活用など、6次産業を中心とした産業クラスターの形成が推測できる。しかし、これについては支援機関の支援体制や役割を確認する必要がある、今後の研究課題としたい。

その他、ケルン大学のグローバル化の推進と戦略は日本の大学のそれに参考になることが多かったようにも思う。

最後に感想であるが、11日間で2カ国を視察したが見るもの全てが新鮮であった。ドイツでは多種多様な人種が共存していることが容易に見て取れた。

しかし、ケルンで出会った小室氏や町田氏を見ていて、短期の視察に終わらせず可能な限り現地に住んで、その土地を知りその土地の人と触れ合うことで、深く地域を理解することが出来るのではないと思った。私達の学びはここから始まると思った。

(大土悠起)

以上、「2017年度 海外地域調査実習報告」の成果報告としてここに学生の記録をとどめておく。Köln大学のE.Boris 教授、B.Amelie准教授、ポスドクF.Sevastian、Abe助教等関係者をはじめ、Köln市エネクスレインの建築家小室大輔様、同市在住の町田綾子様等、多くの皆様に感謝する。

(柳井雅也)